

日本道德教育学会 第95回大会

令和2（2020）年度春季大会

発表要旨集（紙上発表）

大会テーマ

道德の授業と道德教育における「体験」の意味を考える

令和2（2020）年7月4日（土）・7月5日（日）

会場 東京家政大学

ご挨拶

今の時代だからこそその道德教育を共に考える

－ 大会会場校にての開催中止のお詫びと本学会のこれから －

本学会会長 永田 繁雄

令和2年度は、新型コロナウイルス感染に伴う社会状況の中、学校教育も休校対応や遠隔授業など、イレギュラーかつ苦渋の中のスタートとなりました。そして、都道府県を越えた移動や大規模な集会の自粛が引き続き求められており、7月上旬に開催を予定していた本年度春季・第95回（東京家政大学）大会の会場校にての開催は断念せざるを得ないこととなりました。何とぞご理解くださいますようお願いいたします。

このような時、一人一人の豊かな生き方を後押しする道德教育の研究を関心の中核とする私たちの学会であればこそ、自粛の姿勢は率先して示すべきものだと思います。そして、社会全体では、いわゆる「新たな日常」の中、例えば若年層から高齢者までの世代相互に、また、はからずも感染された方、医療従事者とその当事者でない方々相互に、「優しい想像力」をもった関わり合いが求められています。これはまさに、私たちが長く追求し続けている道德教育が、現況下でその底力をどこまで発揮できるのか、その壮大な実験と実証をしているように思えてなりません。

その中で、突然の状況変化を十分には飲み込めないかもしれない子供たちが、健気にも大人の言葉を守り、感染予防に実直に心を砕く姿は、私たちが積み上げてきた教育の結実の1つ表れだとも感じ、そこに心強さとこれからへの希望さえ湧いてきます。

さて、本大会は、全体テーマを「道德の授業と道德教育における『体験』の意味を考える」としていました。半世紀ぶりに本年度の開催が見込まれていた2020年東京オリンピックの直前の、まさに東京の地での大会でもあり、実体験や実践と道德教育との連動、道德授業でのリアリティのある体験型教材や体験的な学習の生かし方などを、参加された方々で議論し合う2日間にしたいと考えておりました。また、本大会にはいつもの大会にもまして多くの自由研究発表の申し込みを得ており、それを何とか生かしたいとの思いから、ギリギリまで可能性を探り、分科会設定も進めていただいております。

しかし、対面開催はやはり難しいと判断し、運営委員長の走井洋一先生と学会事務局等で相談し、今回は、自由研究発表を申し込まれた方々のご了解を得ながら発表要旨集にし、特別な形として全ての会員の方々にお送りすることで、紙上公開による発表機会を確保することとしました。このことが可能となりましたのは、走井先生を中心とした大会関係者の大変なご尽力があればこそです。改めて心より感謝申し上げます。手に取りましたら、是非とも各発表者の熱い思いや種々の知見に触れていただき、ご意見やご感想等をお聞かせいただく機会をもっていただけたらと思います。

会員の皆様には、健康にくれぐれもご留意され、それぞれの地にて、今の時代だからこそその道德教育実践や研究を深めていただくことを期待するとともに、また一堂に会しての学びの機会が近いことを確信しつつ、ご挨拶とさせていただきます。

御挨拶～お詫びに代えて～

第95回大会運営委員長 走井洋一

2020（令和2）年7月4、5日に、東京家政大学において開催させていただく予定であった日本道徳教育学会第95回大会については、すでに本学会ホームページ等を通じてお知らせさせていただきましたように、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の拡大防止の観点から中止させていただくことになりました。本学での開催をお認めいただき、ここまで御支援をいただいた永田繁雄会長をはじめ理事会・事務局のみなさま、シンポジウムでの御登壇をお願いしていたみなさま、自由研究発表に申込をいただいたみなさま、そして何よりも、本大会に参加していただく予定だった会員のみなさまに、ここまでの御尽力にお礼申し上げますとともに、開催に至らなかったこと、また自由研究発表をこのような形でお届けすることになったことをお詫び申し上げます。

新型コロナウイルスによって私たちの生活は大きく変わりました。この原稿を執筆している現在、いわゆる「第一波」は様々な方たちの叡智と尽力によって小康状態へと至りつつありますが、しかしながら、この状況が継続する保証はありません。私たちはこのウィルスと共存するいわゆるウィズコロナあるいはポストコロナの時代に生きていくことを余儀なくされたといつてよいと思います。すなわち、私たちの社会や生活の在り方がこれまでと異なったものとなることを意味しています。そしてこのことは道徳教育に携わる私たちがこれからの社会をどのように創っていくのかという問題に向き合いながら、道徳や道徳教育の在り方を模索することを求めているといつてよいのではないかと考えております。

さて、本大会では、道徳科のみならず、道徳教育そのものと体験（活動）との関係を改めて問い直すことをテーマとして掲げさせていただいておりました。それは、小学校、中学校ともに道徳科が施行された後に、そしてまた、道徳科の「質の高い多様な指導方法」の1つとして「道徳的行為に関する体験的な学習」が掲げられたこの時期に、道徳科の授業にとどまらず、体験そのものもつ意味を問い直したいという思いからでした。ただ、この新型コロナウイルスとの向き合い方あるいは社会のあり方を考え直すことを今私たちが向き合っている体験そのものから喚起されたのだとすれば、大会開催には至りませんでした。こうした状況が私たちに道徳や道徳教育を改めて考えさせる機会になったといえるかもしれません。

今回は会員のみなさまと道徳について議論をさせていただく機会を得ることができませんでした。いずれかの機会にこのような私たちが直面しているさまざまな状況を踏まえたうえでの道徳や道徳教育の在り方を議論させていただく機会を得られることを願うとともに、みなさまの御健勝を心より祈念して御挨拶とさせていただきますと存じます。

大会趣旨

テーマ：道徳の授業と道徳教育における「体験」の意味を考える

大会趣旨：

およそ半世紀ぶりに夏季オリンピック・パラリンピックが東京で行われる。オリンピックの父といわれる P. d. クーベルタンが唱えたオリンピズムとは「スポーツを通して心身を向上させ、文化・国籍などさまざまな違いを乗り越え、友情、連帯感、フェアプレーの精神をもって、平和でよりよい世界の実現に貢献すること」であった。ここにはスポーツを通じて、心身の調和を保ち、もって世界平和を実現することが企図されている。

さて、道徳の授業ではこれまで心の教育といわれ、具体的な行動を問うことは忌避されてきた。ただ、1998（平成 10）年告示学習指導要領で体験活動の充実が謳われて以降、他の活動と連携したりする取り組みが行われてきた。また、2015（平成 27）年一部改正学習指導要領において道徳が特別の教科と位置づけられ、道徳教育に係る評価等の在り方に関する専門家会議「「特別の教科 道徳」の指導方法・評価等について（報告）」（2016（平成 28）年 7 月）において「質の高い多様な指導方法」の例として「道徳的行為に関する体験的な学習」が示されたことから、道徳の授業における体験的な学習も取り組まれている。

本大会においては、「特別の教科 道徳」施行後 2 年（中学校においては 1 年）を経た今、教育活動全体を通じた体験活動や道徳の授業における体験的な学習のこれまでの実践を振り返りながら、そもそも道徳教育にとって「体験」がいかなる意味をもちうるのかについて検討していきたい。スポーツを通じた心身の調和を目指すオリンピック・パラリンピックが行われるこの年に、心の教育としての道徳教育において身体的な活動としての体験がどのような意味をもつのかを検討することに大きな意義があると考え次第である。

※本大会については、2020 年に実施される予定であったオリンピック・パラリンピックを契機として、上記のような大会テーマを掲げさせていただいておりました。このことを記録としてとどめさせていただきます。また、大会の実施には至りませんでした。自由研究発表においてもこの趣旨に即した発表申込・要旨提出を多数いただきました。この場を借りてお礼申し上げます。（第 95 回大会運営委員会）

大会シンポジウム（未実施）

テーマ：道徳の授業と道徳教育における「体験」の意味を考える

企画趣旨：

道徳の授業において直接的に体験を扱うことを含めた指導方法の工夫が求められることになりました。一方で、道徳性の形成にとって体験がもつ意味を問うことなく、安易に体験的な学習を導入するだけでは実質的な効果は期待できません。それゆえ、本大会では、道徳性を育むことを目指す道徳の授業及び道徳教育における「体験」の意味を問い直したいと思います。

コーディネーター： 柴原弘志氏（京都産業大学）

シンポジスト： 西野真由美氏（国立教育政策研究所）

渡邊真魚氏（日本大学）

賞雅枝子氏（東京家政大学附属中学校・高等学校）

コメンテーター： 七條正典氏（高松大学）

※本大会については実施に至りませんでした。シンポジウムとして上記のように企画しておりました。御準備にあたっていただいたコーディネーター、シンポジスト、コメンテーターの各先生方に感謝申し上げますとともに、実施に至らなかったことをお詫び申し上げ、記録としてとどめさせていただきます。（第95回大会運営委員会）

自由研究発表

大会中止に伴い、自由研究発表は要旨提出と要旨集の刊行をもって実施したとみなすこととなりました。

■自由研究発表①（7月5日 9:00～11:50 予定分）

【第1分科会】司会：押谷由夫（武庫川女子大学）

- 1 山本理恵（千葉県東金市立東中学校）
3年間の道徳教育における生徒の変容① -ある生徒の変容から-
- 2 谷山優子（武庫川女子大学大学院・院生）
発達障害のある子供の理解と支援を根幹においた道徳教育
- 3 星裕（北海道教育大学）
道徳の教科化にみられる道徳の内容への影響
- 4 浅部航太（北海道立教育研究所）
道徳科及び感謝介入が児童の対人的感謝に及ぼす影響

【第2分科会】司会：行安茂（元岡山大学）

- 1 佐々木哲哉（岩手大学）
道徳科における対話の源流的方法論の研究～ソクラテスの問答法を手がかりとして～
- 2 龍崎忠（岐阜聖徳学園大学）
成長を実感するものとしての「うれしい」道徳について：倉橋惣三の保育学からの示唆
- 3 中西亮太（東京大学大学院・院生）
J.ロールズの道徳性発達論：正義感覚・動機・家族
- 4 大瀧辰也（東京大学大学院・院生）
道徳における感情の問題—M. C. ヌスバウムの思想を中心に—
- 5 北村博（麗澤大学大学院・院生）
自己肯定感を育てる—論語と老子からみる「よりよく生きる喜び」の道徳科授業等を通して—

【第3分科会】司会：澤田浩一（國學院大學）

- 1 尾池良一（相生学院高等学校明石校）
道徳教材・創作曲「おかん」から
- 2 小山久子（大阪芸術大学）
指導方法改善による道徳に関する意識変化について(3)
—コーディング結果の統計学的検証を中心に—
- 3 Bayasgalan Oyuntsetseg（中央学院大学）
モンゴルの学習指導要領における公民教育の変遷と現行カリキュラムの特徴
- 4 木崎ちのぶ（武庫川女子大学大学院・院生）
道徳教育を基盤として家庭と学校が協働する子育て教育に関する研究（4）
- 5 淀澤勝治（兵庫教育大学）
道徳教材に人物（偉人）を取り扱う意義と課題に関する一考察II

【第4分科会】司会：貝塚茂樹（武蔵野大学）

- 1 加藤智子（愛知県半田市立岩滑小学校）
話し合いのための“空間感醸成”と“価値観を高める”ための取り組み
～子どもたちが生き生きと考え、話し合う道徳科の授業の実践～
- 2 ○松田憲子（神田外語大学） 土田雄一（千葉大学）
小・中学校教員の道徳に関するニーズ調査分析 2019
- 3 小泉志信（東京都東久留米市立南町小学校）
規範を主体的に判断調整する力に関する意識調査
— ルールの機能と自律性・相対性に関する認識の視点を中心に —
- 4 佐藤郷美（東北福祉大学）
道徳における大学生の意識調査の変遷に関する考察

【第5分科会】司会：飯塚秀彦（国立教育政策研究所）

- 1 齋藤道子（武庫川女子大学大学院・院生）
子供自身が自ら問い、考え、実践する道徳的資質・能力の育成
— 道徳教育における「体験」と道徳の授業との効果的連携を図った総合単元的道徳学習の実践 —
- 2 増田千晴（愛知県犬山市立犬山中学校）
“資質・能力の高まり”と、“ねらい”達成を考えて～道徳科の授業を深めるために～
- 3 海老澤宏（東京都八王子市立宮上中学校）
「わかっているようでわかっていないこと」対話によって思考が深まる体験
- 4 工藤亘（玉川大学 TAP センター）
アクティブ道徳教育の試み
— 体験を振り返り、考え議論し、気づき感じ学んだことを行動に移す道徳を目指して

【第6分科会】司会：白木みどり（金沢工業大学）

- 1 溝口哲志（三重県津市立美杉小学校）
ポジティブカードを活用した道徳授業の研究
— ポジティブカードを使って広がりと深まりを生み出す道徳科の授業 —
- 2 鈴木賢一（愛知県あま市立七宝小学校）
実生活において生きて働く実践力を育成する道徳授業
— 自分に何ができるかを判断し、そのことを実行する手立てを考える —
- 3 竹野正純（愛知県江南市立古知野中学校）
みんなで学び合う中心発問を持つ道徳科の授業
- 4 松下恭平（名古屋市立二城小学校）
小学生における外遊びと道徳性に関する一考察
- 5 中野真悟（愛知県刈谷市立日高小学校）
道徳科のパフォーマンス評価に関する一考察

【第7分科会】司会：柳沼良太（岐阜大学）

- 1 松原弘（大阪府和泉市立郷荘中学校）
What?（何に?）と Why?（何で?）で道徳的価値を深める授業
～「自然への畏敬」から「人物への畏敬」への実践～
- 2 山田貞二（岐阜県一宮市立浅井中学校）
道徳の授業における p4c 的手法の可能性～「問い」と「対話」を重視した指導の一考察
- 3 大竹直志（新潟県新潟市立東山の下小学校・新潟大学教職大学院）
職員の同僚性を高め、子どもの成長を支える小学校におけるローテーション道徳の取組
- 4 坂口幸恵（東京都江戸川区教育委員会学習教育支援センター）
児童生徒の規範意識を育む道徳科の指導と評価

■自由研究発表②（7月5日 14:15～18:05 予定分）

【第8分科会】司会：大庭茂美（元九州女子短期大学）

- 1 上原智香子（明治大学大学院・院生）
道徳教育における「体験」の意味を考える—敏感個人差におけるイベントが道徳規範に与える影響—
- 2 石黒真愁子（麗澤大学大学院・院生）
道徳と音楽の関連に関する一考察（2）
- 3 田沼茂紀（國學院大學）
単元型道徳学習の「問い」を紡ぐグループ・モデレーション採用効果の検討
- 4 柴田八重子（愛知淑徳大学）
“問い”を生み出し生かし成長させる、アクティブで深い道徳科の授業
～“対話”と“自己調整学習”を見つめて～

【第9分科会】司会：廣川正昭（新潟医療福祉大学）

- 1 小池孝範（秋田大学）
18世紀後半ドイツ公教育思想における道徳と宗教
- 2 丸岡慎弥（大阪市立香簀小学校）
脳科学の視点から新たな体験的な活動を提案する
- 3 東風安生（横浜商科大学）
宗教的情操の評価に関する心理学と哲学の比較
- 4 居林晃一郎（京都市総合教育センター）
「自己の生き方」を考える道徳教育の推進

【第10分科会】司会：浅見哲也（国立教育政策研究所）

- 1 長谷川元洋（金城学院大学）
問い作り（QFT）による生徒主体の道徳科授業
- 2 間中崇史（埼玉県立宮代特別支援学校）
特別支援学校における道徳教育—自立活動をとおした道徳性の形成—

- 3 齊藤雄輔（栃木県栃木市立吹上中学校）
生徒の道徳教材の読みに関する一考察
- 4 橋本唯隆（教育研究家）
教科化されても続くイジメ—教師イジメ事件に見る綺麗事で終らぬ道徳の本質とは？

【第 11 分科会】司会：島恒生（畿央大学）

- 1 吉田修（東京都府中市立府中第九中学校）
道徳教育を学校運営の柱とし生徒の人間力を高める道徳教育の推進
～道徳科と道徳教育の関連を図り組織的取組みで生徒の心を育む～
- 2 山田美香（名古屋市立大学）
マカオの道徳教育
- 3 寺崎賢一（麗澤大学・都留文科大学）
モラルジレンマの授業は道徳教育とは言えないのではないだろうか
- 4 矢作信行（帝京平成大学）
子供と教師で創る道徳科授業に関する研究

【第 12 分科会】司会：高島元洋（元お茶の水女子大学）

- 1 谷口雄一（摂南大学教職支援センター）
児童生徒を「体験」することが教員にもとらすもの
- 2 塩家崇生（兵庫県伊丹市立総合教育センター）
『キーワード』で子どもたちをつなぎ、考えを広げ、深めていく道徳科の授業づくり
- 3 杉本遼（東京学芸大学附属大泉小学校）
深い学びを生む学習プロセス
～「テーマを追求する学習」と「大主題学習」で、よりよい生き方を考え続ける～
- 4 尾身浩光（新潟大学）
反転授業を取り入れた道徳科授業の指導法の開発

【第 13 分科会】司会：西野真由美（国立教育政策研究所）

- 1 古見豪基（埼玉県和光市立第五小学校）
子どものための哲学（p4c）と道徳科の授業の関連を図った学習システムの提案
- 2 ○黒澤幸子（昭和女子大学現代教育研究所） ○醍醐身奈（目白大学）
「キャリア・パスポート」を中核としたカリキュラム・マネジメントについての考察
～「人格の完成を目指して」取り組んできた世田谷区の教育実践がなぜ注目を集めているのか～
- 3 濱島功（神奈川県小田原市立富士見小学校）
道徳教育と学級経営
- 4 松原好広（東京都江東区立大島南央小学校）
「つながるいのち」の輝きのために～校長講話を通じた児童の道徳性の育成～
- 5 ○高橋史朗（麗澤大学大学院） ○土屋康子（麗澤大学大学院・院生）
感知融合の道徳教育